

河岸町の歴史

特集

にっこうひがしかいどう

日光東街道の宿場町と境河岸

～江戸と奥州を結ぶ日光東街道と境河岸～

境町には、今から400年前に利根川の河畔に奥羽・北関東地方から送られてきた物資を大消費都市江戸に舟運で輸送した境河岸（渡船場=川の港）がありました。境河岸は結城と関宿を結んだ日光東街道の渡し場になっていました。

奥州から江戸へ

江戸時代初期にあたる元和2年（1616）、江戸幕府は関東地方の主な渡し場に対し、お触れを下し、「定船場」を指定しました。そのうちの一つに「境の渡し」が指定されたことによって、境河岸は関東地方の中心的な河岸（渡船場）となりました。

奥州から境河岸までの経路は、奥州街道から奥州と江戸を結ぶ流通路の要になっていた氏家（栃木県）の阿久津河岸から鬼怒川舟運で下り、結城の久保田河岸や山川河岸から日光東街道を通過して境河岸に来ます。境河岸からは、利根川から江戸川に連絡する舟運で江戸を目指したのです。こうして、境河岸は江戸と奥州を結ぶ河川舟運の要衝に位置づけられ、河岸の町として繁栄していったのです。

また、境河岸には北関東、米沢（山形県）や陸奥（岩手県・宮城県・福島県）などの東北地方から年貢米や特産物などの荷物が集まり、

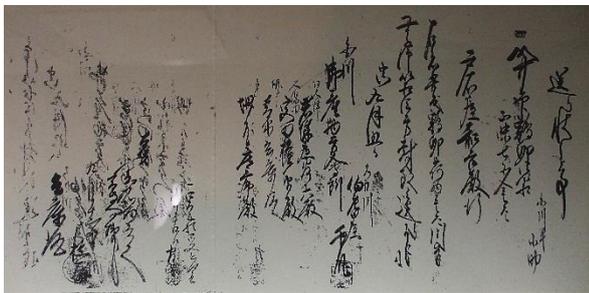
境河岸からたくさんの物資や旅人が川舟で江戸に輸送されました。境町歴史民俗資料館に収蔵されている小松原康之助家文書の「大福帳」（河岸問屋の荷請帳）には、主に米・煙草・鶏卵・茶・野菜・蓮根・牛蒡・綿・絹・漆・紅花が江戸に輸送されていたと記されています。



宿場町さかい

河岸に多くの川舟が出入りするようになると、それとともに街道筋にも船問屋や旅館、茶店などが立ちならび、船頭や荷揚げ人足、馬子、旅人たちが各地から集まりました。次第に境河岸は宿場町としての賑わいを見せるようになりました。

江戸時代、境河岸の河岸問屋（船問屋=今日の運送業者）は、奥羽方面から奥州街道を経て日光東街道（日光東往還）から境に運ばれてきた物資を河岸で受け取り、荷物の品名、数量、荷主、送り先などを記した送り状をつけて高瀬舟に積み込む一方で、江戸川から利根川を經由して境河岸に着いた物資には送り状を書いて馬の背につけて送り先に届けました。そうして「口銭」や「庭銭」、「蔵敷」と呼ばれる手数料や倉庫料を受け取って商売を営んでいました。



「鶏卵荷物送り状」 小松原康之助家文書より

また、河岸問屋は問屋手船や旅館業、仲買問屋などの商売を兼業し、村の名主を勤めることも多く、そこが日光東街道のような街道筋ともなると本陣や脇本陣（公用宿泊施設）を勤めるなど河岸の中心的な存在でした。こうした境河岸の河岸問屋は、先祖が室町幕府最後の将軍足利義昭に仕えていたといわれる

あおきひょうご
青木兵庫家と戦国時代に武田信玄・勝頼2代にわたって仕えていた内藤修理進ないとうしゅりのしんを先祖と
している小松原五右衛門家こまつばらごえもんの2軒で、内藤修理進の子孫が境町に移住してきたのが寛永年間期（1624～1643）と伝えられています。（境町歴史民俗資料館 野村 正昭）
かんえい

境町歴史民俗資料館

〒306-0431 茨城県猿島郡境町西泉田 1326-1 Tel. 0280-81-3353 Fax. 0280-81-3354

利用案内

【入館料】 無料

【休館日】 ○毎週月曜日

【開館時間】 9:00 ~ 16:30

※祝日および振り替え休日（土・日は開館）

※日・月を含む連休のある週は連休最終日の翌日

※年末年始（12/28 ~ 1/4）

交通案内

【自動車】 国道4号バイパス 塚崎交差点（境町）から 約4.5キロ 約10分
首都圏中央連絡自動車道 境古河ICから 約1.5キロ 約5分

【交通機関】 JR 宇都宮線 古河駅
東武スカイツリーライン（伊勢崎線） 東武動物公園駅 下車
朝日バス 境車庫ゆき 約45分
終点 境車庫 下車 徒歩約15分